

## まいちゃんからのおくりもの

大垣市立西部中学校 1年 高木 咲歩

中学生になってから初めて、まいちゃんに会いに行った時の事だった。

「まいちゃん、久しぶり」と、私は声をかけた。しかし、まいちゃんは緊張しているのか、私と目を合わせようとしなかった。その時、まいちゃんと話す事は出来なかったが、まいちゃんに声をかけられただけで満足だった。

まいちゃんと初めて出会ったのは、小学6年生の4月。その時私が通っていた小学校では、「ふれあい学級」といって、休み時間に下級生の子達と交流をもつ時間が年に数回あった。

初めてのふれあい学級の日。下級生の子達に、「一緒に遊ぼう」と声をかけた。すると、ほとんどの子が嬉しそうについて来るのに、まいちゃんだけは違った。

「お姉ちゃんと遊ぼう。一緒においで」そう声をかけても、まいちゃんは反応しない。「みんなと一緒に遊ぼう」と、私は必死でまいちゃんに声をかけた。まいちゃんは「いやだ」としか、返事をしてくれなかった。まいちゃんはなかなか集団行動が出来なかった。

まいちゃんは「ダウン症」という重い障がいを抱えていたのだ。

私はすごく悩んだ。「どうしたら仲良くなれるだろうか」、「どうしたら心を開いてくれるだろうか」…。それ以前に、どんなふうに声をかけたらいいのだろうか…。そんな時、担任の先生からこんなアドバイスがあった。「毎日、休み時間にまいちゃんに会いに行って、少しずつコミュニケーションをとってみたら。そうすれば顔を覚えてもらえるし、一緒に遊べるようになるかもしれない」との事だった。

早速、私は先生に言われた通り、休み時間の度にまいちゃんに会いに行った。「失礼します」教室に入ると、まいちゃんがいた。「まいちゃん、こんにちは」私は話しかけた。「こんにちは」と、思ったよりも普通にまいちゃんから返事が返ってきた。私はこの時、「他の友達と同じように接してみよう」と思った。

それから私は毎日、まいちゃんに会いに行った。だが、親しくなっていくうちに、まいちゃんは私の事を「先生」と呼ぶようになった。まいちゃんの中で「先生」と「6年生のお姉さん」の区別が出来ていないのかもしれない。私は、「先生じゃないよ。お姉ちゃんだよ」と、何度も言って聞かせた。それからまいちゃんは、私の事を「お姉ちゃん」と呼んでくれた。また、私の顔を見る度、笑顔で手を振ってくれた。

短いようで長かった、まいちゃんとの1年間。この1年間、まいちゃんは大きく成長した。と同時に、私の心の中にも大きな変化があった。

最初は不安だらけで、「本当に仲良くなれるかなあ」とか、そんな事ばかり考えていた。でも、実際に接してみると全然違った。私が笑顔で手を振れば、まいちゃんも笑顔で手を振ってくれた。私から積極的に話しかければ、まいちゃんからも積極的に話してくれた。まいちゃんは「特別」ではない。心をもって接すれば、まいちゃんも心で返してくれる。

「普通」の子なのだ。

まいちゃんとの日々を過ごすうちに、私には将来の夢ができた。それは、特殊教育学校の先生になって、障がいをもつ方とふれ合い、その人達の色々な可能性を切り開くこと。

そして、どんな人とでも、差別する事なく平等に接する事の出来る人になりたい。また、心ない差別や偏見によって、一人一人が生まれながらに持つ権利、「人権」を侵さないようにしていきたい。この世界に住む一人一人が、誰かにとっての大切な存在で、その人達を簡単に傷つけてしまうという事は、人としてとてもさみしい。

まいちゃんは私に、たくさんの事を教えてくれた。私がそう思えるようになった事は、まいちゃんからの大きなおくりものだったと思っている。私はまいちゃんから学んだ事を、これからの人生に生かしていきたい。

まいちゃんには、これからもたくさんの人と接して、色々な事を学んでほしいと思う。そして、いつでも笑顔で過ごしてほしい。

もし、まいちゃんが私の顔を忘れてしまったとしても、これだけは忘れないでいてほしい。私がまいちゃんを必要としていた事。私はまいちゃんの事が大好きだった事。

まいちゃん、今でも大好きだよ。そして、ありがとう。